

日本語学習者の自己調整学習ストラテジーと eポートフォリオの役割についての分析

田村芽（ペンシルベニア大学）

Analysis on Self-regulated Learning Strategies and the Role of ePortfolio among L2 Learners of Japanese

Megumu TAMURA, University of Pennsylvania

要旨：本研究では、日本語中級コースで行った自己調整学習の促進を目的としたプロジェクトを通じた学習者の学習ストラテジーや意識の変化、そしてeポートフォリオのサポートツールとしての実用性について、アンケートと学習者のリフレクションを通して検証した。調査結果より、自己調整学習のプロセスであるゴール設定や計画、リフレクションなどを通して、弱点の意識、意味の推測、学んだことの積極的使用、自信を持つことなどを含む多くの学習ストラテジーの変化が見られ、その他の学習にも活かすようになったという学習行動の変化も見られた。また、学習モニターやリフレクションをする過程でのeポートフォリオの効果と今後の可能性が示唆された。

キーワード：eポートフォリオ、自己調整学習、SRL、学習ストラテジー

1. はじめに

学習過程において、学習者が自律性と責任をもつことの必要性が強調されている近年、目標設定や計画、自己モニタリングやリフレクションなどのプロセスが含まれる自己調整学習は、学力の向上だけではなく、21世紀スキルの向上にも影響を与えるとされ、その重要性が唱えられている。また、近年様々な分野で取り入れられるようになったeポートフォリオは批判的思考、意思決定などの発展を促す以外にも、自律的学习を促し、学習過程のリフレクションをする機会を与えるなどの機能があり、学習者の自己調整学習やリフレクション、自己モニターにも役に立つとされている。

本研究では、自己調整学習の促進を目的としたプロジェクトを通じ、学習者の学習ストラテジーや意識の変化をアンケートと学習者のリフレクションを通して検証する。また、eポートフォリオをサポートツールとして取り入れることについての実用性と、今後の日本語教育におけるeポートフォリオの更なる可能性と、コースデザインへどのように活かせるかについても考察する。

2. 自己調整学習とeポートフォリオ

2.1 自己調整学習

自己調整学習 (Self-regulated learning : SRL)は、「学習者がメタ認知、動機付け、行動の3要素において自分自身の学習過程に能動的に関与していること」と定義づけられている (Zimmerman & Schunk, 2001)。「メタ認知」とは自らの学習をモニタリングしてコントロールできること、「動機付け」とは自分自身を有能さ、自己効力、自律性を有する者として認知していること、そして「行動」は学習を最適なものにする環境を自ら選択、構成し、創造することを指す (伊藤, 2008)。SRL

は、図1にあるように予見段階、遂行段階、内省段階の3つが循環的なプロセスとして行われることが望ましいとされている (Zimmerman & Schunk, 2001; 伊藤, 2008)。

SRLにおいて用いられる学習戦略は、学力の向上だけではなく、自己決定力や様々な環境で効率よく働く能力など、21世紀スキルとの向上にも影響を与えるとされている (Wolters, 2010; Chau & Chen, 2010)。

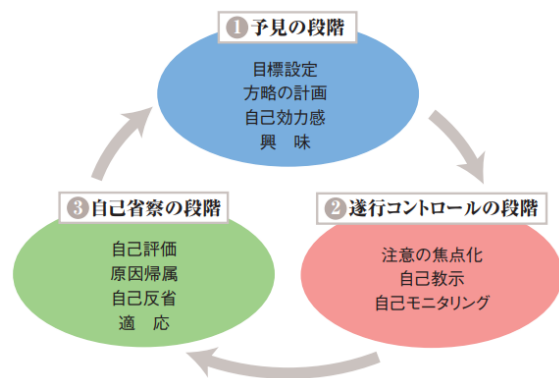


図1：SRLにおける3段階のプロセス (伊藤 2008)

2.2 e ポートフォリオ

e ポートフォリオは学習過程における成果物の収集とまとめ、学習のリフレクションや評価といったプロセスを通して達成感を得られること、そして学習に対する責任の向上と自己で設定した目標達成の手助けとなるなどの利点が挙げられている (Hartnell-Young & Morriss, 2007)。e ポートフォリオのプロセスと SRL プロセスは重複する部分が多いため、e ポートフォリオは SRL プロセスのサポートに貢献するとされている (Alexious & Paraskeva, 2010)。しかしながら、SRL プロセスと学習戦略、e ポートフォリオの関係に関する研究はまだ少なく、特に言語学習における有用性についてはまだ十分に調査されていない。本研究では、日本語中級コースにおいて学習者の SRL の促進を目的としたプロジェクトを行い、学習戦略の使い方や学習意識の変化、そして e ポートフォリオのサポートツールとしての実用性についてアンケートと学習者のリフレクションから検証した。

3. 調査方法と内容、結果

3.1 参加者と内容

本研究は、アメリカ東海岸にある私立大学において、2021 年春学期にリモート形式の中級日本語コースを履修した 10 人の学習者が取り組んだコースプロジェクトを用いて行った。プロジェクトの目的として、自分の日本語能力を理解した上で補強したいスキルを練習をする時間を作り、目標をたてて自分で決めたタスクに自分で取り組む自律学習者を

目指すこと掲げた。学習者は各自で決めた課題に目標と計画を立てて取り組み、その記録のためのeポートフォリオを作成した(表1)。eポートフォリオはGoogle Driveを主なポータルとし、各学習者のシェアフォルダーに提出する形を取った。

表1：プロジェクトの流れ

学期初め	目標と課題内容の決定(個別面談も含む)
学期中	課題6回を、リフレクションと共にeポートフォリオに提出 リフレクションの内容： • がんばった点とよくできたと思う点、特に見てもらいたい点 • 前回のフィードバックを見て、気をつけた点 • 自分が立てた目標にどのくらい近づいたと思うか
学期末	発表とeポートフォリオ最終提出 最終リフレクションの内容： • プロジェクトから学んだこと • 目標達成度 • 難しかった点、大変だった点、次回変えたい点 • プロジェクトが日本語力にどのどのように影響したと思うか • 二つのアンケートを比べて変化があった点、新たに学んだ勉強方法やストラテジー、それが他の日本語学習に影響を与えた点 • 自律学習者を目指すという目的に、どのくらい近づいたか

3.2 アンケートの構成と分析方法

学習者の学習ストラテジーの変化を見るため、学期初めと学期末に外国語学習ストラテジーアンケートを行った。アンケートは、Strategy Inventory for language Learning (SILL: Oxford, 1990)を使用した。SILLは学習者が使用する特定の言語学習ストラテジーを、学習者と教師が評価するツールで、その有用性は研究によって証明されている(Petrogiannis & Gavriilidou, 2015; Danko & Decman, 2019)。学期初めに行うことによって、自己の学習ストラテジーについて意識を持つという目的も持たせた。質問は合計50問あり、それぞれ5段階評価(1: Never or almost never true of me～5: Always or almost always true of me)である。50問の質問は以下のパートAからFの6つのカテゴリーに分類されている。

Part A Memory strategies: 「I use new second language (SL) words in a sentence so I can remember them.」を含む9項目

Part B Cognitive strategies: 「I start conversations in the SL.」を含む15項目

Part C Compensating strategies: 「I try to guess what the other person will say next in the SL.」を含む6項目

Part D Metacognitive strategies: 「I plan my schedule so I will have enough time to study SL.」を含む9項目

Part E Affective strategies: 「I try to relax whenever I feel afraid of using SL.」を含む6項目

Part F Social strategies: 「I practice SL with other students.」を含む6項目

このアンケートの6つのカテゴリーの平均値を学期初めと学期末で比較し、分析した。また、学習者が二回の回答を元にその変化を自己分析した内容とリフレクション、学習者のプロジェクトに対する自由記述回答を合わせてその意識の変化を調査した。

3.3 結果と分析

アンケートの学期末平均値は全てのカテゴリーにおいて学期初めより上回る結果となった。以下に学習者リフレクションに基づいた分析を記す。

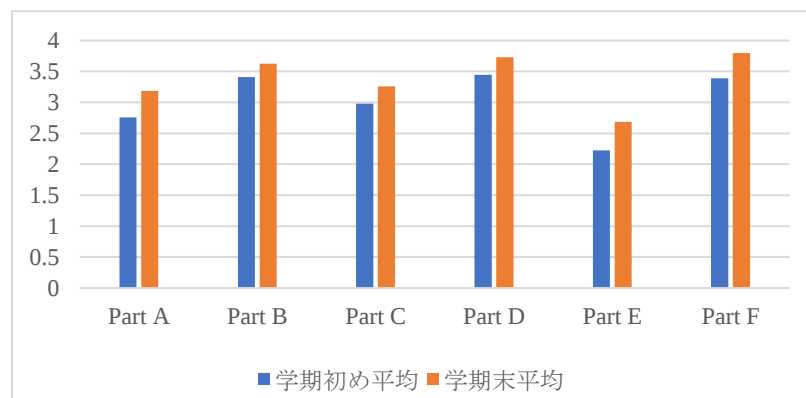


図2：外国語学習ストラテジーアンケート結果

全6回の課題にフィードバックを講師が行い、次の課題ではそのフィードバックを見て気をつけた点をリフレクションとして提出したことが、学習ストラテジーと意識の変化につながったという声が多く見られた。フィードバックで指摘された自らの弱点には特に気を付けるようになり、他の宿題でもそれを活かすようになったという学生も多かった。また、単語リストの作成をプロジェクトに取り入れた学習者が多く、単語の意味と使用法を調べ、積極的に使うようになったという記述、そしてプロジェクトのために普段のクラスで学習したことをより復習するようになったという記述がほとんど全員に見られた。それまでの「正しく使う」ことから「間違いを意識して使う」ように意識が変わったという学習者もあり、自己モニタリングとリフレクションを中心とした学習ストラテジーがこのような学習行動に影響を与えていることがわかる。学んだことを自らの方法で学習に取り入れるアクティブラーニングの言語学習における重要性が表れており、このプロジェクトは「自律学習者を目指す」という目的の達成に有用であったと言える。また、普段の宿題では放置されがちなりフレクションを、eポートフォリオを用いることで行うようになるという効果も表れていると言える。このように、今回のプロジェクトは学習ストラテジーと

意識にプラスに影響したと言える。以下に、三人の学習者のプロジェクト内容とそれぞれが挙げた変化について取り上げる。

まず、学生 A は日本語の歌を英語に訳し、単語リストを作成して歌詞についての自分の解釈を書き、翻訳の練習と歌詞の理解の向上を目的とした課題に取り組んだ。アンケート結果の分析では、特にパート D の「I have clear goals for my Japanese」とパート F の「I ask Japanese speakers for help.」が 3 から 5 に変化した理由にプロジェクト自体が原動力となったと述べている。それまでは特に行っていなかった目標設定の重要性をプロジェクトを通して認識し、フォーカスしたい日本語スキルを考えて学習に取り組むことができたことと述べ、今後もそれを取り入れていきたいとしている。また、日本語学習者にはわかり得ない点についてフィードバックを得られたことでより興味を持つようになり、それがきっかけとなって言語パートナーを見つけ、母語話者の自然な表現や理解の仕方について学びたいと思うようになったと述べている。また、自らを時制力のある方ではないと評価し、今回のプロジェクトでできた言語パートナーと今後もやり取りをすることでモチベーションを維持し続けることができると積極的な姿勢を見せている。

次に、学習者 B は日本語の自然な会話を理解できるようになるという目標を立て、ドラマの要約を書く中で新しい単語や接続表現の使い方を身に着けるという課題を選んだ。クラス内で学んだ接続表現を応用で使えるようになったことや、登場人物の心情や状況説明を工夫して書くことで、読み手にも分かりやすい要約を書けるようになったこと、そしてそれらが自分の気持ちや考えを表す際にも役にたっていることをプロジェクトの成果として挙げている。新しく学んだ単語を自分の文の中で様々な形で使うようになったという点は以前はなかったことで、一つの単語がもつ多様な意味や使い方を知る機会となり、その他の学習でも気を付けるようになったこと、クラスで学んだ内容を以前より復習するようになったことがアンケート上のパート A と B の数値の変化につながったと述べている。また、ドラマを見ていく中で、パート C の「I try to guess what someone would say next in Japanese」にあるように登場人物が次に何を言うか、それに対して相手がどのように答えるかなどなどを推測するようになったと振り返っており、それを自らの会話でも行うようになったと述べている。

学習者 C も歌の翻訳と解釈に取り組んだが、パート C に大きな変化があったことを述べている。知らない単語が出てきた際に全て調べるのではなく、内容から意味を推測するようになり、そのスキルの向上が見られたと自己評価している。そしてそのことが自信につながり、学んだ日本語スキルをより積極的に使うようになったことが、Part D を始めとする全体的な数値の上昇に貢献していると評価している。

学期末アンケートの自由記述回答からは、今回のプロジェクトは自分の興味のある課題を自分のペースで行えるという点で意欲が沸いたという声が多かった。また、課題に責任を持って取り組み、自己モニタリングをするようになったという学習ストラテジーの変化が、今後日本語コースを取り終えた後の自主学習にもプラスに働くだらうという学習者も

おり、eポートフォリオの効果は今後も発揮される考えられる。

4. おわりに

本研究を通して、SRL プロセスを取り入れたプロジェクトを用いることで、学習意識と学習ストラテジーに様々なプラスの変化が確認された。今回はリモート形式のコースだったこともあり、eポートフォリオを有効活用したことが大きく影響していると言える。普段は疎かになりがちな復習やリフレクションが、eポートフォリオをコースに取り入れることで半ば強制的ではあるが可能となり、学習ストラテジーや意識の変化につながると考えられる。オンライン環境で学ぶ機会が増えることが今後も想定されるが、eポートフォリオは特にそういった環境下で効果をより発揮すると思われる。しかしながら、どのような学習形態でも「させられている」意識を拭えない学習者は存在する。eポートフォリオを単に課題の一つとして使用するのみではなく、目的に沿った取り入れ方が重要となる。今後の取り組みとしては、例えば、交渉型プロジェクトとしてeポートフォリオに含める項目やアセスメントの内容を学習者が決めて行えば自律性の高い内容となり、意識に変化も起こるだろう。さらに、今回は行わなかったが、eポートフォリオを学習者自身だけではなく学習者同士を含めた他者に向けたものにすることにより、他者との関連性を高め、互いに学習ストラテジーをシェアし合うよりよい環境作りができるだろう。リフレクティブラーニングを含めた自律学習の手段としてのeポートフォリオの可能性は今後も期待できる。

参考文献

- Alexiou, A., & Paraskeva, F. (2010). Enhancing self-regulated learning skills through the implementation of an e-portfolio tool. *Procedia - Social and Behavioral Sciences*, 2(2), 3048–3054.
- Chau, J., & Cheng, G. (2010). Towards understanding the potential of e-portfolios for independent learning: A qualitative study. *Australasian Journal of Educational Technology*, 26(7).
- Danko, M., & Dečman, M. (2019). The Strategy Inventory for Second Language Learning: Tested, Adapted, and Validated in the Slovenian Higher Education Context. *ESP Today*, 7(2), 207–230.
- Hartnell-Young, E., & Morriss, M. (2007). Digital Portfolios: Powerful Tools for Promoting Professional Growth and Reflection. *School Library Journal*, 53(10).
- Oxford, R. L. (1990). *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know* (1st ed.). Heinle ELT.
- Petrogiannis, K., Gavriilidou, Z. (2015) Strategy Inventory for Language Learning: findings of a validation study in Greece. In M. Carmo (Eds.), *Education Applications & Developments* (pp.223-236). inScience Press
- Zimmerman, B. J. & Schunk, D. H. (2001). Theories of self-regulated learning and academic achievement: An overview and analysis. In B. J. Zimmerman & D. H. Schunk (Eds.), *Self-regulated learning and academic achievement* (pp. 4-37). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum
- Wolters, C. (2010). Self-regulated Learning and the 21 St Century Competencies. http://www.hewlett.org/uploads/Self_Regulated_Learning_21st_Century_Competencies.pdf (Retrieved on March 1, 2021)
- 伊藤崇達 (2008) 『『自ら学ぶ力』を育てる方略—自己調整学習の観点から—』 https://berd.benesse.jp/berd/center/open/berd/2008/07/pdf/13berd_03.pdf (Retrieved on March 1, 2021)